慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	エツセネ教団の共産主義
Sub Title	
Author	高橋, 誠一郎
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1923
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.17, No.3 (1923. 3) ,p.370(58)- 390(78)
JaLC DOI	10.14991/001.19230301-0058
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19230301-0058

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

エッセネ教團の共産主義

高橋誠一郎

一

吾人は曾つて猶太の聖賢が暴富は神を離れしめ、極貧は神を汚すものであつて、至高の經濟的理想は兩者の中間に存するものと觀たることを説いた。（「三田學會雜誌」第十七卷第二號所載「舊約全書に現れたる社會思想」（下）末項參照）。其處には最早共産的傳統の痕跡を發見することを能はずして、私有財産の觀念が明かに認められる。然るに彼れ等の中には又た實際生活に一種の共産主義を誘入せんことを企圖したる數千の人々が在つた。エッセネ（Josephus は Essæi 又たは Essæi と書し、Philon は Essaei と記す）の團體が是れであつた。彼れ等は Flavius Josephus に據れば、西紀前一百五十年に特殊の宗派を形成し、エルサレムの滅落に至るまで其の存在を持續し、紀元第一世紀末に及んで消滅せるものである。エッセネなる語はスリヤの chase、ヘブルの chasid、即ち「敬虔なる」と云へる語の希臘化であつて、其の複數には chasen 及び chasuja の二つの形がある。恐らく希臘文化の侵入に對して、微細なる點に至るまで猶太法制を擁護せんと努めたるマカビ家奮鬪の時代に猶太人の間に起れる熱烈なる宗派にして又た政派たる Chasidim の流を引けるものであらう。要するに彼れ等の名稱、起源、性質、歴史共に皆な幽昏神秘の衣を纏ふてゐるが、而も彼れ等に言説せる同時代の著者は總べて尊敬と欽仰とを以て之れを記してゐる。唯だ彼れ等の間に存する矛盾は吾人を惱ましめるものがある。吾人は先づヒロンが Quod Omnis Probus Liber に於て説く所を抄錄する。（等しくエッセネに關する叙述を包有する彼れの著 De Vita Contemplativa は彼れの死後三世紀の後に基督教の一修道僧が禁欲的國家の禮讃として草したものである）。

「パレスチナにはエッセネと稱せられた四千の有德なる人々が住つて居つた。彼れ等は都市の住民が放逸に流るゝの風あるが爲めに村落に住して都市を避けた。彼れ等の多くは農業に從事し、他は平和なる職業を營み、斯くて又た自己と其の隣人とに仕事を與へてゐた。彼れ等は銀をも金をも蓄積することなく、又た彼

れ等は自己に大所得を來さしむるが爲めに土地を取得するともなかつた。而も彼れ等は單に生活支持に必要なる資料を確保するが爲めにのみ勞作した。斯くて實際上彼れ等は不運に起因せずして、自發的に財富を追求することなきが爲めに、何等の資產をも有することなき唯一の人士である。而も尙ほ彼れ等は實に凡ゆる人々の中に在つて最も富める者である。蓋し彼れ等は滿足して不足なきを富と思惟するが故である。吾人は彼れ等の間に箭矢、投槍、刀劍、甲冑、胸板、及び楯の職匠、即ち武器又たは概して戰爭に使用せらるる物の製造に從事する者を一つも看出すことがないであらう。彼れ等は貪慾心を喚起する一切の事物を回避せんと欲するが故に、彼れ等は曾つて商業、製酒及び航海業に想到したことがない。又た彼れ等の間には一つの奴隷も存しない。總べての者は自由であつて、相互の爲めに勞作する。彼れ等が支配者及び統治者を蔑視するは、曾だに後者が平等を侵犯するが故に不正であるのみならず、又た以て彼れ等が自然の制度を廢棄するの故を以て、不敬虔なるに基くものである。自然の制度は母の如く總べてのものを眞個、相愛の同胞として創造し育成する。這般の關係は狡猾と貪婪との勝利に由つて破壞せられる。是れ等のものは信實に代ゆるに疏隔を以てし、愛情に代ゆるに憎惡を以てする。エッセネは家族及び共同團體の統治に於て、善惡に關する知識に於て、敬虔、神聖及び正義の原理を敎へられる。而して彼れ等は其の三個の倫理的概念若しくは原理として神と德と人類の愛を承認する。人類の愛の表明は稱揚せらるゝこと高きに過ぐることなく能はざる仁愛、公正及び財貨の共同である。吾人は後者に關して些か附言したい。先づ第一に、何人も總べてに屬することなき家屋を有することがない。彼れ等が相和して共同に居住するの事實に加ふるに、總べての家屋は遠きより來れる仲間に對して開放せられてゐる。又た倉庫及び其の中に藏せらるゝ糧食は被服類と共に、總べての人に屬する。食料品は又た共同の食事時間を遵守することなき人々に對しても供給せられる。又た概して親しく共同に居住し、食事し、生活するの狀態は他の如何なる種族の間に在つても是れ等の人々の間に於けるが如く高き完全の程度に到達したことがない。即ち彼れ等は彼れ等の間に取得せるものを自己の爲めに保存することなく、之れを合同して一般の消費に提供するが故である。病者及び老人は最大なる注意と溫厚と

を以て過せられる。」

「彼れ等は其處に共同に居住し社團、友愛、組合、共同食卓に倣つて組織せられ（κατὰ συσσίτια τοιούμενοι）、而して整然公共の爲めに勞働を行ふ。又た何人も、家屋、奴隷、地產、家畜若しくは其の他凡も財富を供給するものは總べて之れを自己の所有たらしむることがない。而も彼れ等は一切のものを無差別に蓄積して之れよりして總べての共同の利用を得る。彼れ等は彼れ等が自ら諸種の勞働によりて取得せる貨幣を一個の被選保管人に交付する。保管人は之れを受納し、之れを以て必要なるものを購入し、又た十分なる榮養物及び其の他の生活必要品を分與する。」（Quod Omnis, xii.）。彼れ等は又た食卓を管理する僧侶をも選出した。而して彼れ等は絶對に其の選任せる首長に順服する。（Josephus, Ant. Jud., XVIII., 5 etc.）

二

ジョーシーフスは又た彼れ等の生活を下の如くに描寫する。（此の敎團に關說せる彼れの書は Περὶ τοῦ Ἰουδαϊκοῦ πολέμου と Ἰουδαϊκὴ Ἀρχαιολογία の二である。彼れ等は曉に起きて日出前には毫も俗事を談じない。而して彼れ等は太陽に對つて其の昇天を之れに切願するが如くに祈禱を捧げる。「彼れ等は其の後、其の首長より離れて、各々其の習得せる勞働に着手する、而して彼れ等が第五時間まで（日出より十一時まで）勤勉に勞働を行へる時、彼れ等は一定の場所に集合し、自から亞麻布を用意して、冷水を以て身體を洗ふ。斯く身體を清潔ならしめたる後、彼れ等は其の食堂に入る、其の分班に屬せざる者は總べて此處に入ることを許されない。彼れ等が此處に入るは清淨にして端正、恰も聖堂に入るが如くである。彼れ等が靜かに其處に着席し、麵包燒き人來りて、各人に其の麵包を供し、又た料理人が同じやうに肴を盛れる一枚の皿を吾人の前に置ける時、僧侶は來りて食事の祈禱を行ふ。而して何物と雖も祈を捧ぐる以前に之れを食ふことを許されない。彼れ等は午餐の終りに臨んで、同樣に感謝を表し、斯くの如くして食事の始めと終りとに一切の食物の施與者として神を禮讚する。而して後、彼れ等は再び聖衣に等しき其の衣服を脫して、再び夕頃まで其の勞働に從事するのである。晩餐は全然午餐と等しく行はれる。而して外來の旅客ある時は、彼れ等は之れを彼れ等と共に食卓に

着かしめる。家を亂す叫喊も騷動もない、而して彼れ等が互に相談る際には、總べての者が一時に言葉を發することなく、相次いで順次に物語るが故に、戸外に在る人々には家内の靜寂なる狀態は崇敬の念を起さしむる神秘の觀がある。彼れ等が靜寂なる生活は彼れ等が其の生活支持の必要以上に飲食せざるが故に、常に中庸を失することなきに因るものである。一般に彼れ等は其の首長の指定なくして何等の勞働をも執行することがない、而も彼れ等は自由の判斷に從つて憐憫と救助の準備を行ふことを得るのである。偶々危急の場合に際しては總べての人は救助を必要とし又た之れに値する者を扶助し、貧民にも亦た食物を供することが出來る。然しながら彼れ等は豫め其の首長若くは管理者に告ぐることなくして、何物と雖も、之れを友人及び緣者に送ることを許されない。」（Bell. Jud., II. viii.）。

共産主義は彼れ等の間に在つて極端まで進められた。曩きにも揭げたるが如く、共有は衣類にまでも及んでゐる。斯くてヒローンは曰ふ「啻だに食料のみならず、被服も亦た彼れ等に共同であつた。即ち冬の爲めには厚い外套が在り、夏の爲めには又た輕い上着がある、斯くて各人は任意に之れを使用することが出來た。即ち一人の有する所のものは全體の所有と看做され、全體の有する物は各個の所有と思惟せられた」。（Quod Omnis, xii.）。ジョーシーフスも亦た曰く「彼れ等は富を蔑視した、而して彼れ等の營める共同生活は驚異であつた。斯くて彼れ等の間には財産によつて自己を傑出せしめんと欲する者を看出すことが不可能であつた。蓋し此の團體に加入することを許さるゝ者は其の財産を該教團に讓渡するの定めであつたが故である。從つて掠奪と貧困、餘冗と奢侈とは孰れも存することがなかつたのである」。彼れ等の團體の經濟的基礎を形成せるものは粗放的經濟であつた。「彼れ等は全然農耕に盡瘁した」と説けるジョーシーフスの言には固より幾分の誇張はあるが、彼れ等が農耕を以て主たる勞働と爲せることは明かである。彼れ等は手工をも亦た營んだのであるが、唯だ前揭ヒローンの所言の如く、奢侈及び武器の製造のみが嚴禁せられてゐた。彼れ等は賣買交易を行ふことなく、互に些の報酬をも求むることなく、亦た與ふることなくして、自由に他の欲する物を之れに與へ、又た自己の欲する所のものを他より得たのである。（Bell. Jud., II. viii, 3, 4; Ant. Jud. XVIII. i. 5.）。

旅行に際して護身用の棍棒を帶ぶるの外は、武器を携ふることを許されない。衣服と靴とは破るゝまで、着用せられる。油を以て淸めることは却つて不淨ならしめるものであると觀せられる。從僕は人をして不正ならしむるものとして禁止せられる。一百人を以て法廷を構成し、其の全員一致の判決は改變し得ざるものと爲つてゐる。大罪人は長時の除名又たは永遠の破門を以て所罰せられる。彼れ等は外部の者の調へたる物は一切之れを食すことを許されざるが故に、そは常に大なる窮苦を來さしめ、往々にして死に至らしめる。哲學は無用にして且つ人力に及ばざるものとして閑却せられる。而も倫理學は熱心に研究せられる。

三

結婚に關しては或る者はエッセネ人は獨身を選べりと述べ、他は彼れ等が結婚を行へることを主張する。彼れ等は結婚を禁止することなきも、而も其の多數は自ら婦人との一切の接觸を排斥せるものであらう。ジョーシーフスは其の「猶太戰史」に於て曰く「彼れ等は結婚を蔑視せるも、而も外人の子が未だ若くして猶ほ黨育し得る際に、之れを養ひ、自己の子の如くに保育して、其の風俗習慣を以て之れを敎育する。斯くの如きは彼れ等が結婚及び人間の繁殖を抑制禁壓せんとするが爲めではない。而も彼れ等は言ふ、唯だ一人の男子のみを以て滿足する婦人なきを以て、人は常に婦人の不眞に對して警戒しなければならぬ」と。(ibid., II. viii.)。彼れは又た其の「古代猶太」に於て曰く「彼れ等は妻を娶り、奴隷を保有することがない。後者は罪惡であるが、前者は不和軋轢の機會を與ふるものであると彼れ等は考へる」と。(ibid., XVIII. i. 5.)。彼れ等は啻だに養子の制度のみならず「人世の荒海に無益の奪鬪を爲すに倦みて」來り投ずる成年者あるが爲めに其の員數を維持することが出來た。(Plinius, Hist. Nat., V. xvi-xvii.)。

彼れ等新來者は其の垢離を行ひつゝある間に着用す可き前掛 (kenaphaim)、白衣、及び其の排泄物をして太陽の光線に當らしめざるが爲めに穴を掘るの用に使ふる鏟(シャベル)に類せる小具を給與せられる。彼れ等は一ヶ年間團體の外に在つて其の制欲的規定を遵守し、其の節制が試される。次いで二ヶ年の新たなる試驗が行はれる。此の期間に於ては彼れ等は淨めの儀式には參加するが、食事には加はらない。是れ等の試驗に滿足する結果を上げたる時は、彼れ等は完全なる團員に擧げられ、

峻烈なる宣誓によつて神を崇め、正義を守り、一切のものに對して然るも、殊に有司に對して忠實に、而して彼れ等自身權威の地位に立つことある場合には衣冠の美によつて他を壓することなく、誠實と正直とを愛し、其の仲間に對して何事をも隱蔽することなく、外人に對しては何物をも露洩することなく、又た如何なる犧牲を拂ふも彼れ等の天使の書と名とを秘密に附す可き責任を負ふ。是れが彼れ等の宣誓を行ふ唯一の場合である。彼れ等の言辭は極めて神嚴であつて、ヘロデ王すら彼れ等をして忠順の宣誓を行ふことを免除せる程であつたと云ふことが一般に認められてゐる。其の或る者は同一の規定に從ふも、唯だ結婚を行ふの點に於て一般と異なるのであるが、而もそは單に秩序維持の必要に由るのであつて、又た三年間の試練の後であり、婦人が健全にして、出産の見込ある場合に限るのである。エッセネの多數は高齢に達し、心身の堅忍を得て、羅馬人が彼れ等に加へたる最も殘忍なる苛責も其の所信を動すこと能はず、彼れ等は微笑を湛へて死に着けりと傳へられてゐる。全員は四階級に分たれてゐる。

エッセネ人は著しく非政治的傾向を有してゐた。彼れ等は國家に面をそむけて、社會的倫理と社會經濟とを以て至要なるものと信じた。而も最も兇暴なる君主と雖も彼れ等に對して最大なる尊敬を拂つて居つた。猶太のヒローンは其の書中に記して曰く「最も殘忍なる支配者及び總督と雖も、彼れ等に對して危害を加へることが出來なかつた。却つて彼れ等は是れ等の人々の清淨なる德に威壓せられ、恰も彼れ等が自己の法規を制定するの權利を有し、本來自由なるが如くに、之れに對するに好意を以てした。彼れ等は彼れ等が共同の食事及び充實、幸福なる生活の最も顯著なる證左たる其の最高貴なる財貨共有の制度を推奬した」と。(Quod Omnis, xii.)。

一切の政治的關係を脱離して一派の宗教的團體を形成せる彼れ等の理想は最も神嚴なる宗教的歸依に到達するに在つた。此の目的の爲めに彼れ等は俗界と隔絶して、死海の西岸より深く内部に入れる荒原に本據を構へ、パレスチナに居住せるものも多くは僻遠の地方及び小市を選んだ。是れ等の地方に於て彼れ等の大多數が前述せる如き財貨の共有と獨身の生活とを行へることは孰れも皆な現世的煩勞を免れんとするの所願に出づるものであつた。彼れ等は又た宣誓と職

爭との否認、安息制度の嚴守、特に、又た清淨に關する利未の戒律に對する細心なる注意を以て其の特徵として居つた。彼れ等の名は彼れ等が沐浴すること多きの事實に發すると說く者がある。（要するに 'Εσσηνοι 若しくは 'Ισσαῖοι なる語の究極の語源は不明である）彼れ等の制欲主義は理論的神秘主義を發達せしめた。而して奇蹟的治療と惡魔祓とは彼れ等に歸せられてゐる。彼れ等は治療に關する奇書 Sepher Refuoth（一般にソロモンの作と稱せられてゐる）を所有してゐた。

四

エッセネと基督敎との關係及び之れに對する其の影響は論爭多き點である。英國の自然敎信者及び大陸の合理主義者は基督敎を以てエッセネより漸次に、而して極めて自然に發達せるものと看做すに努め、フリーメーソンはエッセネ敎に於て純然たる基督敎を看出さんとする。之れに反して The Jewish Encyclopedia は「基督と其の弟子の態度は全然非エッセネ的であつた」と誌してゐる。要するに彼れ等と基督との關係に就いては何等明確なるものを知悉することが出來ない。而も吾人は基督敎の敎理がエッセネの其れと本質上大なる類似を有することを認めなければならない。（Joseph Ernest Renan, La Vie de Jésus, 1863, p. 102; Francesco S. Nitti, Catholic Socialism, Eng. trans. by Mary Mackintosh, 1908, p. 58.）尙ほ兩者の類似點に就きては A Dictionary of Bible, ed. by Hasting, vol. I. "Essenes" の條下參照）。然しながら洗禮者ヨハネと基督とがエッセネであつたと云ふ說は制欲主義と自意的貧窮とより自然に、且つ獨立に生じたる類似に基く推定に過ぎない。

バビロンに虜囚たりし猶太人の子孫が其の鄕土に歸還せる後に於ける猶太の宗敎生活は絕えず緊張の度を加へて行つた。Burton 及び Mathews に從へば、斯くの如き宗敎的發達は（第一）パリサイ派に於て特に强烈なりしメシッヤの希望、即ち神は軈がて猶太人の間に其の全能なる王國を建設し、全世界は神の指定せるもの、即ちメシッヤの首都エルサレムに從屬す可しと爲すの希望（第二）エルサレムの宮に集中せる「崇禮主義」（血腥き犧牲を是認することのないエッセネ人すらエルサレムの宮に供物を送つたのである）並びに（第三）「遵法主義」の三要素を抱擁するものであつた。「遵法主義」は宗敎をして戒律の保持に歸せしめんとするの傾向である。そは「歸還」後の猶太人によつて行はれたる生活の凡ゆる方面及び要件に對してモー

セの律法を適用せんとするの大努力より生ずる。パリサイ派とエッセネ派とは律法に對する盲目的順服の態度を維持するに於て同樣である。兩者は共にユズラが律法の研究を以て宗教家の重大なる任務と認めてより遵法主義的精神が通過し來りたる發達から生じたものである。而も兩者は重要なる點に於て相違する。パリサイ派は人が當だにモーセの成文法のみならず、又た「口述の律法」、詳言すれば、ラビ即ち職業的法敎師が此の成文法を生活の凡ゆる方面に適用するに際して下したる、次第に多きを加へつゝある細密なる決定をも遵守す可きことを信ずる。彼れ等は又た熱心に肉體の復活と幾分限定せられたる意志の自由とを信じてゐた。然しながら、彼れ等は國民として又た個人として猶太人をモーセ及び口述の律法と一致せざる總べてものより「分離」せしめんことを欲した。洵にパリサイの名は「分離」を意味するヘブル語 Parash より出づるものであつた。這般の原則は政策に在つては彼れ等をして國外の同盟者及び王國を嫌避せしめ、私生活に在つては彼れ等をして卑賤なる人々及び罪あるものと思惟せられたる者と交際せしめたのである。エッセネ派は或る點に於てはパリサイ派よりも更らに嚴正なるものであつた。彼れ等は毫も意志の自由を信ずることがなかつた。彼れ等は嚴格なる純潔の原則を遵守して制欲主義と共產主義とに赴いた。斯くて彼れ等は出世間的の態度に出でたるが故に、事實上同國民の指導者であつたパリサイ派に比して實際的影響尠きものであつた。パリサイ派及びエッセネ派に對して宗派よりも寧ろ政派であり司祭長及び多數の司祭を包含し、是れが爲めに遵法主義よりも崇禮主義に傾き、パリサイ派の口述律法と何等の交渉なく、モーセの律法其の者に據つて生活せんことを欲し、人意の完全なる自由を信ずるも、肉體の復活を信ずることなく、生活上に於てはより大なる自由、政略上に於ては外國との同盟に替するものはサドカイ派であつた。(Ernest De Witt Burton and Shailer Mathews, The Life of Christ, an aid to historical study and a condensed commentary on the Gospels, 12th. ed., 1916, pp. 38-39.)。基督が是れ等三宗派の中、パリサイ及びサドカイの兩派に對しては常に嚴烈なる言辭を以て攻擊を行ひつゝあるに反し(「馬太傳」第二十一章第四十五節、同第二十二章第二十三節以下、同第二十三章第二節以下等)、エッセネに就きて一語も云ふ所なきが故に、洗禮者のヨハネ及び基督を以て共にエッセネ派に屬するも

のと做すの論すら存する。然し乍ら基督教は其の發生の當時に於てエッセネ派が最も重要視せるが如き一定特殊の生活樣式に囚るゝものではなかつた。(Henry Osborn Taylor, Ancient Ideals, a study of intellectual and spiritual growth from early times to the establishment of Christianity, vol. II, 2nd. ed., 1913, p. 263.)

五

エッセネ派の起源も亦た固より不明である。果して佛教の一派、及び祇教即ちゾロアスタ教の影響を受けたるものであるか、若しくは純乎たる猶太教の内部から自然に發達せるものであるか。吾人は今日に於て之れを確定し得可き資料を有してゐない。然し乍ら最初にエッセネ教團を傳へたる亞歴山利亞のヒロームが一方には毫も猶太民族の信條に對する探究を廢することなきと共に、他方に於ては又た周到なる希臘文化の研究者であり、殊にプラトーン哲學に對して造詣深かりし事實を想見したならば、少くとも彼れの筆に描かれたるエッセネ教團は猶太教と希臘哲學との結合より成れるの事實を拒否することを得まい。基督の時代に先んずる凡そ三百年に亙つて希臘哲學者の思想、殊にオルヒュース教徒(Orphici)、ピタゴラスの學徒、プラトーン主義者及びストア學徒の其れが亞歴山大王の征服に次げる希臘語及び希臘文學の弘布と共に遠く且つ廣く東方に傳播して居つた。是れ等のものは最も多樣なる起原を有する他の思想と邂逅し混変した。アナトリア、波斯、バビロン及びエジプトの宗教、其れ自體複雜なる、所産たる占星學等が是れである。殊に又た是れ等の諸思想はヒローンの腦裡に於てヘブルの神學と最も完全なる混変を行つたのである。希臘哲學を通じてモーセの律法を解釋し、之れに系統を與へんとせる彼れは人間の至高善を定限的概念を超絶せる神性の觀想中に置ける最初の人であつた。(Eduard Zeller, Die Philosophie der Griechen in ihrer geschichtlichen Entwicklung, 5. Aufl., 1892, 3. Bd., S. 421) 而して彼れの表明せる體系は原始基督教の信仰と酷似せるものであつた。彼れは「光明」と「知能」と「善良」とを本體とする一個の神、總べてのものゝ父と世界の創造者にして支持者たる「神の子」、「ロゴス」(Λόγος)(「言葉」と譯さるゝの常であるが、寧ろ「理性」と做す可きものであつて、又た「神の影像」及び「神の睿智」と稱せられる)とを認める。ロゴスはヘブルの側に於ては「箴言」中に詩的に人格化せられたるが如き「睿智」、神の計畫に遡ることが出來、希臘側に

於ては、啻だにストア學派の λόγος が存するのみでなく、此の語はプラトーンによつて至高の存在の表明、若しくは之れよりの放射たる理性の意味に使用せられてゐる。ヒローンは特に「箴言」、「傳道の書」、「ソロモンの睿智の書」等の謂ゆる「睿智書」よりも受けたる半ばプラトーン的にして半ば聖典的なる觀念と言語を使用して、是れ等のものをロゴスに關する基督教理を暗示する形態に發達せしめた。「希伯來書」すら殆んどヒローンがロゴスに關して用ひたるに等しき言辭を以て基督の人物と任務とを叙してゐるが、第一世紀末に及んで福音者の聖ヨハネは特に其の「福音書」の第一章に於てヨセフの子ナザレのイエスを以てロゴスの權化と同一視したのであつた。小亞細亞に於ける希臘市エフエソスに於て筆を執れる此の福音者は固よりヒローンの著を熟知せるものであつたであらう。尚ほ初期基督教の著者中には内在のロゴス（Λόγος ἐνδιάθετος）即ち猶ほ「父」の胸裡に殘存しつゝある「神的理性」と、發言せられたるロゴス（Λόγος προφορικός）即ち現世に對して發せられたる「言葉」とを區別せる者がある。基督教の思想家は啻だに亞歴山利亞哲學のみならず、プラトーン及びストア學者の書中に於ける其の出所を熱心に研究して、基督教の諸眞理を表明し説明するに資する所多きを看出した。而して斯くの如き傾向は亞歴山利亞のクレメンス及び其の弟子オーリヂエーヌスに至つて其の頂點に到達したのであつた。（Religions of the Past and Present, a series of lectures delivered by members of the faculty of the University of Pennsylvania, ed. by James A. Montgomery, 1918, pp. 387-389.）

果して然らばエッセネの實行せる共産主義、少くともヒローンによりて叙述せられたる其の共産主義は又た幾分希臘思想と交渉あるものではあるまいか。エッセネ人は種族としては猶太人であつたが、言語は希臘語を使用して居つたらしい。ジョーシーフスは又たエッセネがピタゴラス派の其れに酷似せる生活方法を行へりと稱してゐる。（Ant. Jud., XV. x. 4.）而して彼れ等の全共産主義的制度の基礎が消費の共同に存して、社會的生産に非ざることは云ふまでもない。洵にそは共同家計の共産主義であつた。（Karl Kautsky, Der Ursprung des Christentums, 12 Auf., 1922, S. 325.）

彼れ等の靈肉觀にも亦た希臘思想との一致を看出し得ることは既にジョーシーフスの認めたる所である。彼れ等は死を歡迎した。蓋し肉體は腐敗す可きも

のであつて、之れを組成しつゝある物質は永續することがないが、靈魂は不死であつて永遠に活き、而して最も明敏なる精氣より發して或る自然の思慕によつて牢獄に入るが如くに肉體中に引込まれたるが故である。「然しながら、靈魂が肉の紐から放たれたる時、そは長き束縛より解放せられたるが爲めに歡喜して高く登り行くのである。而して彼れ等は希臘人の意見と一致して、善魂は大洋の彼方なる降雪又たは暴風雨若しくは炎熱の爲めに苦しめらるゝことなく、常に平靜にして、大洋より吹き送る涼しき微風によつて爽快ならしめらるゝの地に住することを斷言する。惡靈に對しては彼れ等は嘗つて止むことなき苦惱に滿てる凄慘、騷然たる洞窟を割り當てる」。(Bell. Jud. I. iii. 8.)。

（完）

（一九二三年二月）。

（附記）恰も余が本篇を草しつゝありし際、横濱禮吉氏の研究論文「新約時代の社會思想」を入手した。其の第二章は主としてエッセネを論じたるものである。不日公刊の機ある可きを切望する。

慶應義塾の
三田通りの
カフエー
米華堂
電話高輪二二六六
●カルピスとソーダ水
●熟いコーヒーと紅茶
●宴會至便料理と菓子は御存じの美味